

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 21 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520329

研究課題名(和文) 異性配役の身体を探る：オールメール・シェイクスピアからプロペラまで

研究課題名(英文) In Search of the Cross-Dressing Body: from Shakespeare to Propeller

研究代表者

阪本 久美子 (Hilberdink-Sakamoto, Kumiko)

日本大学・生物資源科学部・准教授

研究者番号：50319240

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円、(間接経費) 780,000円

研究成果の概要(和文)：シェイクスピア上演における異性配役の変遷を歴史的に概観した後、実例として現代日本およびイギリスにおける上演を検証した。異性装はシェイクスピアのドラマツルギーとして劇中に内在しているが、実際の上演で役者と演じる役のジェンダーを違わせることにより、さらに独特の演劇的效果が生じている。劇場という空間で、異性配役がひとつの劇的装置として、観客を上演に巻き込み非日常的な体験を与えると同時に、現実社会の性差を再考する機会を与えている。

研究成果の概要(英文)：Following a historical overview of the cross gender casting in Shakespeare productions, this study investigates both Japanese and British performances in which performers cross dress. Cross dressing is part of the Bard's dramaturgy and a feature exploited in some of his plays. The cross gender casting employed in modern theatre further generates unique theatrical effects, increasing audience involvement in shaping the world of play-acting and also re-examining gender differences in society.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学 英米・英語圏文学

キーワード：イギリス演劇 シェイクスピア 上演研究 ジェンダー 身体

1. 研究開始当初の背景

(1) 科学研究費助成事業、「シェイクスピアの道化を演じる - 道化の役作りに関する日英比較研究」を進めるにあたり、演劇における身体性に注目するに至った。昨今のイギリス演劇においては、役者の身体が上演において重要になりつつある、つまり演劇が役者中心になる傾向がある。このことを踏まえた上で、身体性、身体表象の研究を、異性配役男優による女性登場人物および女優による男性登場人物の表象および受容の研究に発展させたいと考えた。

(2) 日本における異性配役上演としては、2004年に始まった彩の国さいたま芸術劇場の蜷川幸雄演出によるオールメール・シリーズが人気を博しており、2010年末までに五作品が上演されている。また、男優のみの劇団スタジオライフも、シェイクスピア作品を手がけている。女優による男裝配役では、吉田日出子が主演を演じた流山児事務所の『悪漢リチャード』(流山児祥演出、1994年)、白石加代子が老王を演じたりゅーとびあの『リア王 影法師』(栗田芳宏演出、2004年)のほかに、安寿ミラ主演の改作版『ハムレット』(栗田芳宏演出、2002年、2004年、2007年)があった。

(3) イギリスにおける異性配役上演としては、1991年初演のチーク・パイ・ジョウルの『お気に召すまま』(デクラン・ドネラン演出)が男裝配役の先駆的作品となり、1997年には男優のみでシェイクスピアを演じる劇団プロペラが設立された。一方、女装配役は、ナショナルシアターにおける『リチャード二世』(デボラ・ウォーナー演出、フィオナ・ショウ主演、1995-96年)が賛否両論を得た。また、1997年設立のグローブ座では、「オリジナル・プラクティス」として男裝配役のみだけでなく、女装配役の上演が試みられてきた。

(4) 以上のように、過去20年間に異性配役を含む上演が、日英ともに相当数登場し、その結果、英語圏の異性配役を含む上演を扱った著作、*Shakespeare Re-Dressed: Cross-Gender Casting in Contemporary Performance* が編纂されるに至った。

2. 研究の目的

(1) 異性配役上演を歴史的に概観するために、20世紀以降の異性配役による日本およびイギリスにおける上演に関する記録を編纂する。

(2) 過去20年間における個々の上演を分析し、役(登場人物)の身体と役者の身体の相関関係を解明し、観客に共有される「異性配役の身体」がどのように構築されるかを探り出す。

(3) 文化におけるジェンダー形成の問題と舞台における身体表象のつながりに着目し、身体論、パフォーマンス研究およびジェンダー論、クイア論を踏まえた上で、「異性配役

の身体」を検証する。

(4) 伝統演劇や宝塚歌劇における異性配役の伝統がある日本と、シェイクスピアの時代における異性配役(少年俳優または男優による女装)以来、異性配役の伝統が途切れてしまったイギリス。文化的・社会的背景および演劇の伝統も異なった日英の上演を比較することにより、二国の「異性配役の身体」- 男装の場合と女装の場合 - の特性を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 研究の初期調査として、20世紀以降の異性配役の上演史を調査する。先行研究、劇場アーカイブ資料などから、女装、男装の両方を含めた異性配役上演のマッピングを行う。

(2) 実際の異性配役上演を、日本およびイギリスにおいて視察する。上演ビデオが視聴可能な場合は、何度も繰り返し視聴して、詳細に分析する。同時に、上演された時期の社会的、文化的状況を把握するための文献資料を調査する。

(3) 上演に関する資料(prompt book 他劇団側から提供される資料および劇評など受容側が発表した資料)を研究する。同時に、テキスト理解のため、当該シェイクスピア劇に関する批評、および理論的バックボーンを固めるために、身体論、パフォーマンス理論、ジェンダー論などに関する文献を調査する。

(4) 上演分析および文献資料分析の結果、舞台上で展開される役者による異性の表象をとおして、観客が構築すると考える「異性配役の身体」の仮説をまとめる。

4. 研究成果

(1) 国内の調査

彩の国さいたま芸術劇場オールメール・シェイクスピア・シリーズの『トロイラスとクレシダ』(蜷川幸雄演出、2012年)を視察した。また過去に視察したオールメール・シリーズ『お気に召すまま』(2004年)、『間違いの喜劇』(2006年)、『恋の骨折り損』(2007年)、『から騒ぎ』(2008年)、『じゃじゃ馬ならし』(2010年)の映像資料を入手し、詳細な分析を試みた。その他のオールメール上演に関しては、D-BOYS(Dステ)による『ヴェニス商人』(青木豪演出、2011年)および『十二夜』(2013年)を視察した。また、1985年設立のオールメール劇団スタジオライフによるシェイクスピア作品上演『十二夜』(倉田淳 2009年、2011年)および『じゃじゃ馬ならし』(2010年)、『夏の夜の夢』(2006年、2008年、2011年)の上演視察および録画映像の分析を行なった。

宝塚歌劇団による公演、特にシェイクスピア作品に関しては、星組、雪組、月組にて上演された、ジェラルド・プレスギルヴィックがシェイクスピアの作品を改作したミュージカル『ロミオとジュリエット』(小池修

一郎演出、2010年、2011年、2012年、2013年)に注目した。これらを視察するとともに、入手可能になった録画映像を分析し、宝塚固有の「男役」の形成を検証した。また、宝塚歌劇団による過去のシェイクスピア上演を調査し、パウ・シェイクスピア・シリーズの『ロミオとジュリエット'99』(植田景子演出、1999年)、『夢・シェイクスピア-夏の夜の夢』(中村暁演出、1999年)、『Say It Again-『ヴェローナの二紳士』より』(正塚晴彦演出、1999年)、『エピファニー-『十二夜』より』(大野拓史演出、1999年)、『冬物語』(児玉明子演出、1999年)、『十二夜』(木村信司演出、1999年)、『TEMPEST』(斎藤吉正演出、1999年)、『KEAN』(谷正純演出、2007年)、『HAMLET!!』(藤井大介演出、2010年)の録画映像を分析した。一方で、100年の歴史を持つ宝塚に関する日本語および英語の文献の調査も行ない、総合的に「男役」を取り巻く理論を研究した。

2011年より劇団柿喰う客が「女体シェイクスピア」シリーズというオールフェメール上演を開始したが、主催・演出の中屋敷法仁がシェイクスピア作品を改作した『悩殺ハムレット』(2011年)、『絶頂マクベス』(2012年)、『発情ジュリアス・シーザー』(2013年)、『失禁リア』(2013年)を視察および、入手可能な録画映像により上演の詳細な分析を行ない、宝塚との比較も試みながら、全く異なった男性の表象を検証した。

また、日本の伝統芸能における異性配役が現代劇上演にもたらしている影響を探るため、歌舞伎作品も視察し、女形の演技に関する文献を調査した。

(2) イギリスにおける調査

初期調査として20世紀以降の異性配役の上演史を調査するため、2011年8月および2012年3月にイギリスに出張した。オールメール劇団プロペラの四作品『ヘンリー5世』、『冬物語』(エドワード・ホール演出、2010~11年)、『十二夜』、『じゃじゃ馬馴らし』(2011~12年) 身体性を強調したフィジカル・シアターの劇団コンプリシテおよびDV8の最新作を視察し、劇場アーカイヴにおいては異性配役上演の代表的作品を閲覧した。

2012年10月には、再びイギリスに調査研究のために出張し、ロンドンのグローブ座において、『十二夜』および『リチャード三世』(ティム・キャロル演出、2002年初演)を調査した。この上演は、グローブ座が開設当初行なった男性俳優のみの上演を含む「オリジナル・プラクティス」の試みのリバイバルであった。また、女性役を演じた男優や、オリジナル・プラクティス上演に参加した男優の講演およびインタビューを拝聴し、文献収集およびその他の上演の観劇調査も行なった。

2013年2月には、後述の学会出張に際し、ストラットフォードにて上演および文献調査を行なった。

2014年3月には、劇団プロペラによる『真

夏の夜の夢』および『間違いの喜劇』を視察し、劇場アーカイブにて資料収集を行なった。

以上のイギリスによる調査では、日本における異性配役の身体構築と比較検証し、文化的・社会的背景と異性の表象との関係を解明した。

(3) 個々の上演・劇団の研究

女性的であると言われる登場人物ハムレットが、女優によって演じられた上演に関する研究を進めた。トニー・ハワードなどによる先行研究を調査し、日本における麻実れいと安寿ミラによるハムレット、柿食客の女優のみによる改作『悩殺ハムレット』との比較を試みた。女性が主役の男性登場人物を演じることにより、ジェンダーの固定化を疑問視するジュディス・パトラーの「ジェンダーのパフォーマティビティ論」が、性の流動性を示した上演によって証明されることがわかった。

ペトルーキオの妻キャサリンへの言動は、現代社会ではDVと重なり、それゆえシェイクスピアの『じゃじゃ馬ならし』における男女の関係は、現代舞台上で上演する際には問題となりがちだ。この作品が、女優のみまたは男優のみで演じられた場合の、ジェンダー・ポリティクスへの影響を探った。オールメールの『じゃじゃ馬ならし』(彩の国さいたま芸術劇場)と女優のみのグローブ座『じゃじゃ馬ならし』(フィリダ・ロイド演出、2003年)の二つの上演を出発点として調査を進めた。役者の身体の一部としての性と、上演の際に作り出す登場人物の性との間の相互作用が、ジェンダーに関して問題点を含んだテキストの上演にもたらす効果が解明された。

日本のシェイクスピア上演における異性配役の代表的事例として、蜷川幸雄演出のオールメール『トロイラスとクレシダ』を、観劇を含めた視聴覚資料閲覧および上演資料から調査し、特にシェイクスピアのテキストにおけるクレシダの表象と関連させて考察し、論文として発表した。

プレスギュルヴィック版ミュージカル『ロミオとジュリエット』のフランス語オリジナル(2001年、2010年別バージョン、2012年) 男女の役者による日本語版(小池修一郎演出、2011年、2013年)およびオールフェメールで演じられた宝塚版改作上演を比較研究した。異なった男性登場人物を演じる「男役」や、ロミオとジュリエットの「男女関係」が、かもしだすセクシュアリティやエロティシズムに注目し、男女共演版との違いを解明した。この結果は、2013年2月にイギリスのデモンストフォード大学にて開催された学会、および2013年10月の第52回日本シェイクスピア学会にて口頭発表した。

その他、継続的に行なってきた道化の身体・身体性の研究と異性配役を関連付けて、二本の論文を発表した。

(4) 日本とイギリスにおける相当数の上演を調査することにより、社会的・文化的な背

景も考慮した上で、現代における異性配役の全体像を理解することができたと考える。また、男装と女装の場合における受容の相違や、シングル・ジェンダーで演じられた場合の性、つまり同性による異性愛の表象の曖昧さと、異性配役ゆえの高度な演劇性にも議論を進めた。異性配役のもたらす演劇空間における効果は多様であり、検証を深めれば深めるほど、複雑さを増すようであつた。個々のシェイクスピア作品のテキストと上演の比較、そして文化的、社会的に固有な劇団による異性配役の具体例を大量にかつ包括的に検証することにより、つかみどころのない舞台表象における異性配役の身体構築が理解できたと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

阪本久美子、Lear の道化のアフターライフ：Antony Sher およびそれ以降の道化の表象、人間科学研究、査読有、第 11 号、2014、1-20

Kumiko Hilberdink-Sakamoto、Reconsidering ‘Doubling’: the case of Globe on Tour’s *Comedy of Errors* (2009-2011)、*The Journal of Arts and Humanities (JAH)*、査読有、Vol.2 no. 6、2013、105-15

阪本久美子、The Tragedy of Cressida, or In Search of Cressida’s Cressida、人間科学研究、査読有、第 10 号、2013、1-10

Kumiko Hilberdink-Sakamoto、Jonathan Munby’s *Romeo and Juliet* and Olivier Py’s *Roméo et Juliette* (Unabridged Version)、*Shakespeare Studies*、査読有、Vol. 50、2012、50-52

〔学会発表〕(計 2 件)

阪本久美子、「清く正しく美しい」ジュリエットをねらう二人の男(役) - 宝塚版『ミュージカル ロミオとジュリエット』、日本シェイクスピア協会主催第 52 回シェイクスピア学会、鹿児島大学、2013 年 10 月 6 日

Kumiko Hilberdink-Sakamoto、The Male Body and the Female Body in Takarazuka’s *Romeo and Juliet*、‘Shakespeare and Japan’ Conference, De Montfort University, Leicester, UK、2013 年 2 月 26 日

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

阪本 久美子

(Kumiko Hilberdink-Sakamoto)

日本大学・生物資源科学部・准教授

研究者番号：50319240

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：